Short ショートコメント ★★★

あなたが眠る間
(While You were Sleeping)

2024年／韓国映画
配給：日活／100分

2025（令和7）年9月13日鑑賞　テアトル梅田

Data　2025−87

監督：チャン・ユニョン
出演：チュ・ジャヒョン／イ・ムセン／パク・ミンジョン

みどころ

認知症になるのもイヤだが、交通事故による記憶喪失もイヤ！他方、記憶を喪失した妻を主人公にした涙を誘うラブストーリーは、『私の頭の中の消しゴム』（04年）を筆頭に数多いが、本作はある2年間だけの記憶喪失がミソ！

導入部に見る若夫婦は幸せいっぱいだが、その裏に隠された秘密が、ここにも、あそこにも！交通事故も1度ならず、2度も発生する上、後半に展開される“聴き込み調査”の中で明らかにされていく衝撃の事実の数々にビックリ！

しかして、「号泣必至の衝撃的な夫婦愛。その結末は、記憶に残り続ける・・・」、「愛した夫の“真実”に、大粒の涙が止まらないー」とチラシに謳われた本作の結末は？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆私が『私の頭の中の消しゴム』（04年）（『シネマ9』137頁を観たのは2005年10／30。私は同作の「みどころ」に、次のとおり書き、星5つとした。

> ……幸せな彼女を襲う難病とその闘いの中で展開されるラブストーリーというありきたりなテーマだが、よく練られたストーリー構成の下ではコンビニやバッティングセンターも立派な舞台となるうえ、何ともしゃれたタイトルと美しい音楽に感心！　そして韓国随一の美男美女の口から出るセリフは、前半と後半で全く違う立場からくり返されるため、強く印象に残るもの。ソン・イェジンのお相手はヨン様よりウソン様の方がよほどお似合い……？そして「ここは天国ですか？」というセリフは、ひょっとして今年の流行語大賞の候補に……？　観客みんなが頭の中に持つ「消しゴム」をすり減らさず、いつまでも記憶しておきたい傑作に大拍手！

◆それからちょうど20年。チラシには、「『私の頭の中の消しゴム』『八月のクリスマス』

など純愛物語の名作を生んだ韓国映画に、新たな愛の名作が誕生した。」と書かれ、「妻はなぜ記憶を失ったのかー？夫が必至で隠した秘密・・・それは、あまりにも切ない究極の愛のかたち。」、「号泣必至の衝撃的な夫婦愛。その結末は、記憶に残り続ける・・・」、「愛した夫の“真実”に、大粒の涙が止まらないー」等の“見出し”が躍っている。さあ、『私の頭の中の消しゴム』を見た時の感動と涙が、本作で再び蘇るだろうか？

◆交通事故は幸せな人間生活を一瞬にして地獄に突き落としてしまう思いがけない不幸だが、映画ではそれが悲喜こもごもの人間ドラマを生み出すためのテクニック（？）としてよく使われる。それは本作も同じだが、本作が一種のミステリー仕立てのようになっているのは、その交通事故の実態が容易に表示されず、その当事者や事故状況、そして被害状況を小出しにしながらストーリーが綴られていくためだ。

　そもそも、冒頭に示される小説家の夫キム・ジュンソク（イ・ムセン）と美術講師の妻ユン・ドッキ（チュ・ジャヒョン）の幸せそうな夫婦生活を見ていると、観客はそこに何の問題点も見出すことができないはずだ。しかし、ドッキがスタジオ「称賛クジラ」の管理者で友人の女性、ヨ・ヨンミ（パク・ミンジョン）と仲良く話している姿や、子連れのヨンミとジュンソクが親しげに話している姿を見ていると、アレレ、アレレ？こりゃ、どこかおかしいぞ！誰でもそう思い始めるはず・・・。

◆去る 2025 年 9／5、昭和を代表する歌手・橋幸夫が 82 歳で亡くなったが、その死因はアルツハイマー型認知症だ。人間は年をとれば誰でも物忘れがひどくなり、認知症の症状が出始めるが、交通事故による頭部へのショックによって脳の一部が損傷を受けた結果、過去の“ある 2 年間だけ”記憶を喪失することがあるらしい。本作における妻ドッキの症状がそれらしい。この夫婦が医師と交わす会話を聞いているとそれがよくわかるが、本当にそんなことってあるの？

　私にはそれがよくわからないが、本作は“記憶をなくしたドッキの 2 年間”がミステリーめいた物語を導くテーマになるので、それに注目！いわば、その種明かしをめぐるストーリーが本作のキモだから、それはネタバレ厳禁！その姿は、あなた自身の目でしっかりと。

◆渡辺謙が主演していた『明日の記憶』（06 年）（『シネマ 10』172 頁）は、『私の頭の中の消しゴム』と同じく、「若年性アルツハイマー」をテーマにした素晴らしい映画だった。この両作では、日々記憶が失われていく恐怖から少しでも逃れ、少しでもそれを防止しようと努力する痛々しい姿が涙を誘った。それと同じように本作では、交通事故によってある 2 年間の記憶を失ったドッキとその夫ジュンソクが、その記憶を取り戻すために涙ぐましい努力を続ける涙、涙、また涙の物語！私はそう予想していたが、意外にもそうではなく、

ドッキが自分の記憶にない間の出来事を夫のジュンソクに尋ねても、彼はそれを教えようとしなかったから、アレレ、アレレ・・・？それはもちろん、担当のチョ医師（ソン・ジル）の助言に沿ったものだが、子連れのヨンミと時々会っている姿が奇妙に映るのは私だけ・・・？このジュンソクは本当に優しい夫なの？それとも・・・？

◆“記憶喪失”をテーマにした映画では、同時に“ウソも方便”のストーリーが作られることが多い。それは、ある時期の 2 年分の記憶を喪失しているドッキに優しい夫のジュンソクがうまく合わせていくために仕方のないものだから、いわば「優しい嘘」、「必要な嘘」。そしてまた「許される嘘」であり、「ウソも方便」と評価されるべきものだ。

　他方、近時不動産バブルが弾けた中国はもちろん、格差が拡大する韓国でも、不動産をめぐる事情は大変なはずだ。しかし、本作にみるジュンソク・ドッキ夫妻の住まいは実に洒落たもの。売れない小説家（らしい？）ジュンソクと、しがない美術講師（らしい？）ドッキは子供もいないのに、なぜそんな広い立派な家に住んでいるの？そう思っていると案の定・・・？

◆小説家とは便利な職業で、“執筆のため”一定期間ホテルにこもりきりになるのも許されるらしい。普通はそんな行動を取れば、“何か怪しい”と妻から疑いの目を向けられるものだが、本作でそんな行動が出るのは後半からになるので、それに注目！ジュンソクは本当にホテルの一室にこもって執筆活動をしていたの？本作後半からの私立探偵並みのドッキの聴き込み調査によって次々と明らかになってくる衝撃の事実とは？

◆ドッキの“聴き込み調査”（？）の中で明らかになってくる最大の衝撃（の事実）は、ジュンソクに子供がいたこと。しかも、その女の子の世話を、ドッキの友人であるヨンミがしていることだ。そんなバカな！すると、この女の子はジュンソクとヨンミの間の不倫の子供！？ヨンミは今もドッキの友人として時々会っていたのではないの？そんな友人が“背徳の夫”ジュンソクの浮気相手だったの？

　本作後半からのドッキの“聴き込み調査”によって、ドッキは何ともハチャメチャな、ありえない夫の実態を知らされ、失神してしまうから超ヤバイ。こんな展開から本当に、チラシで言われているような、「愛した夫の“真実”に、大粒の涙が止まらないー」ような展開になるの？

2025（令和 7）年 9 月 17 日記